

数学と青春 (川田紫音)

[おすすめしたい本]

『青の数学』

王城夕紀／著

「大雪の中、彼女の上にだけ数字が降っていた。」

『青の数学』は、数学に魅せられた高校生たちの青春小説である。主人公の栢山が、かつて高校生にして数学オリンピックを制した天才、京香凜と出会い「数学とは何か」という問いの答えを追い求めていく。数学という一見読者を選びそうな内容ながら、多くの人々に愛される一冊だ。

昔から算数や数学が好きだった私は、中学一年生の時、図書館で見つけた数学の文字に惹かれてこの本を手にとった。冒頭の一文は、その書き出しである。「数字が降る」という見慣れない、しかし美しい表現に、一瞬で引き込まれた。その後には、中学生どころか、高校に入った現在でも理解が及ばないような問題の描写が続く。しかし、分からないから読む手が止まる、というようなことはなかった。それがこの本の魅力であり、紹介したい理由である。文章の美しさと、まるで自分が問題を解いているかのように感じさせる心情描写が、読者をより物語に引き込む。数学が分からずとも、難しい問いを解く場面も推理小説のように、どこかワクワク感を感じられる。

私は、数学の好き嫌いや得意不得意に関わらず、自分と同世代の人にこの本を勧めたい。作中で主人公は、問題を解いて競い合う決闘というシステムでさまざまな相手と戦うことになる。決闘のシステムは、「たった一人で挑んでいるのが、自分一人ではないと知るため」に作られたという。これは勉強、部活など、日々努力している人の心に響く言葉だ。

私自身意外だったが、インターネット上のレビューでは、数学が苦手な人の感想が多くみられた。同じような人はかなり多いと思うが、それを理由に読まないのは惜しい一冊だ。題材に縛られず、ひとつの青春小説としてぜひ手に取ってみてほしい。読み終える時には、少し数学を好きになっているかもしれない。

海を越えた遺書 (岩本修治)

[おすすめしたい本]

『収容所から来た遺書』

辺見じゅん／著

本書は第二次世界大戦後、シベリアに抑留された日本人捕虜山本幡男が、死を目前にして日本の家族に宛てた遺書を巡るノンフィクションである。遺書は、母へ、妻へ、そして子ども達へとそれぞれ綴られているが、これらの遺書は容易に日本に届けられた訳ではなかった。当時、収容所に抑留された日本人捕虜は言動について厳しい規制を受けていた。特に日本国内との手紙のやり取りは一層の検閲を受け、それが遺書であろうと容赦なく、日本へ届くのは絶望的であったという。では、どのようにしてこれらの遺書が日本の家族に届けられたのであろうか。驚くべき方法で成し遂げられたことに驚愕する。その手立てとは、山本を心から慕う仲間達による「遺書の暗記」であった。形にある文字は規制を受けたとしても、心や頭の中にしまい込んだ言葉を止めることはできない。そう考えた仲間は過酷な労働や飢餓という劣悪な境遇の中で、一字一句漏らさぬよう分担して暗記することに努めたのだった。こうして頭にたたき込まれた遺書は後に文字としてしたためられ、帰国を許された仲間達によって日本の遺族の元に届けられたのである。

「唯の一目でもいいから、お母さんに会って死にたかった。お母さんと一言、二言交すだけで、どれだけ私は満足したことでせう。十年の永い月日を私と会ふ日を唯一の楽しみに生きてこられたお母さんに、先立って逝く私の不孝を、どうかお母さん許して下さい。」

家族はこれをどんな気持ちで読んだのであろうか。十年待ち続け、必ず帰ってくると信じて支え合ってきた家族の思いはいかばかりかと胸が痛む。そして遺書は、妻・子ども達へと綴られているが、どれもが感謝や希望の言葉に溢れ、山本の無念を察することができる。戦争を扱う書籍が多くある中で、本書は家族を引き裂く戦争の酷さを別の切り口から描き、読む者の心を揺さぶる一冊であろう。

心がざわついたとき、ビタミンとなる本 (山田秀子)

[おすすめしたい本]

『言志四録』

佐藤一斎／著 川上正光／全訳注

岐阜県が輩出した佐藤一斎の著書。『言志四録』を読みたいと思ったのは、小泉純一郎元首相が、衆議院の答弁にこの句を引用したことを知ったのが始まりだった。

岐阜県岩村藩で生まれた、佐藤一斎。私は、岐阜で育ったのに、知らなかったのだ。そんなすごい人？なにせ、佐久間象山、渡辺華山を弟子とし、あの西郷隆盛が愛読書としていた『言志四録』を書いた人。そんなことが調べるとわかり、読んでみたくなった。文庫本で全4巻。難しいかと思ったが、現代語で訳されているのでわかりやすい。

そして、答弁で発せられた一句とは、一斎が67歳から78歳までの12年間に書き記した『言志四録』(三)言志晩録の中にあつた。

第60条「少にして学べば、則ち壮にして為すこと有り。壮にして学べば、則ち老いて衰えず。老いて学べば、則ち死して朽ちず。」

なんだか難しいけれど、気持ちがいい。急に心が晴れ晴れとして、声に出すと背筋がまっすぐになる。意味は、「学は一生の大事」。しかし、もっと奥が深い意味があるような気がする。

私も、還暦をとうに過ぎてしまい、まだまだ学ぶことはあるだろうと思いながらも、新しいことを始めることさえも、臆病になり、先行きをあれこれと考えるようになった。人とのかわり方も、若い時よりも上手に諍いを避けるようになり、今生きていくうえでそれほど困ることも少なくなってきた。それでいいのかと、自分に問いかけたくなった。生きている以上は、もっと学び、人のお役に立てることはないかと、気持ちまで若返ってきた。

最初にこの本を読んだ時から、25年がたった。その間、この本は、勤務していた会社で、正義か悪か、理不尽な上司の命令に反発して詰め寄った時や、近年のコロナ禍で悶々とした日々の中で私のそばにいてくれた。体の中が浄化するおすすめの1冊である。

カフカに学ぼう (細江隆一)

[おすすめしたい本]

『絶望名人カフカの人生論』

フランツ・カフカ／著 頭木弘樹／編訳

カフカと言えば「変身」だ。目が覚めると巨大な芋虫になっていたという発想が強烈で、私は夢にまで見てしまった。自分が芋虫になり、家族から邪見にされる夢を。

そのカフカ、今や「絶望名人」として有名らしい。「絶望名人」とは「絶望するような言葉を並べる名人」という意味である。従って、言葉にポジティブ感はない。

「将来にむかって歩くことは、ぼくにはできません。将来にむかってつまづくこと、これはできます。いちばんうまくできるのは、倒れたままでいることです」。

ポジティブな人なら「なんてネガティブ」と思うだけだろうが、ネガティブな人は「わかる、わかる、その気持ち」と逆に安心するかもしれない。「七転び八起き」という言葉がポジティブ・ワードなら、「七転八倒」はネガティブ・ワード。カフカという作家は、ネガティブ・ワードの達人である。これを小説ではなく、恋人への手紙や、父への手紙で書いているところが面白い。

きっとカフカなら、落ち込んだ人がいたらこう言うだろう。

「落ち込んでいいんだよ。僕だってそうやってきたんだから」。

仕事が嫌だという人には「僕だって大嫌いだった。辞めると分かったらものすごく嬉しかったよ」と言うだろう。カフカは「絶望名人」には違いないのだが、自ら命を絶つことは否定する。絶望しても、生き続けなさいと言うメッセージが根底にはある。

現代の日本には、「がんばれ」メッセージが溢れている。落ち込んだ人へ「がんばれ」、失敗した人へ「気にするな」。ヒット曲にも同じ傾向がある。

けれど、カフカのように、「いったん絶望しても、粛々と生き続けなさい」というメッセージもまた、歓迎されるべきだろう。全てが前向きでは疲れてしまうからだ。「絶望名人」の言葉に耳を傾けて欲しい。

戦争とは大切な人がいなくなること (永瀬文)

[おすすめしたい本]

『秋』

かこさとし／文・絵

一昨年夏、かこさとし氏の展覧会に、小学生の孫と出かけた。娘達が子どもの頃、読んでいた「からすのパンやさん」「どろぼうがっこう」などの懐かしい絵本がどのように書かれたのかを、興味深く見させてもらうとともに、「みずとはなんじゃ？」や「たべもののたび」など、科学的な絵本も多く、著者の経歴も思いも何も知らずに、ただただその魅力的な内容に惹かれて、子ども達に与えていたことを、恥ずかしく思った。

今年になって、ある書評で、かこさとし氏長女鈴木万里氏が、お父様の古い原稿を整理しておられたときに、「秋」という紙芝居用の原稿を発見し、絵本として発刊されたことを知った。早速読ませてもらったところ、ウクライナの戦争が始まる半年前に、このような絵本が発刊されていたことに衝撃を受けた。かこさとし氏の実体験に基づいた、第二次世界大戦中のできごとを、静かな言葉と、優しい絵で描かれた絵本だった。盲腸炎で入院したときに、治療をしてくれた先生方が、病室でお世話をしてくれたおばさんの息子が、落下傘が開かず地上にたたきつけられた兵士が、知り合いのお父さんが、ともだちのお兄さんが、皆自分の前から、消えてしまった秋という季節。それまで大好きだった実り豊かな秋が、この年だけは、秋が早く過ぎ去れと祈った。「だれがいったい戦争で得をするというのだろう。」「戦争をするだけのお金やものを、みんなの生活がよくなることに使ったら、ほんとうにたのしい世の中がつかれるだろうに。」今、世界中の人たちが感じているそのままの思いが、本の中にあふれている。

鈴木氏によると、原稿には「自分の力不足で出版することができず誠に申し訳ない。」と記された差出人不明の編集者からの手紙も入っていたとのこと。本当に、この本が世に出て良かった。そして、一人でも多くの方に、この絵本を読んできたい。

変わる関係性 (松永唯愛)

[おすすめしたい本]

『君の臍臓をたべたい』

住野よる／著

「私、あとちょっとで死んじゃうんだ。」ただのクラスメイトにいきなり告げられたら、あなたはどうしますか？

病院の待合室で●●が何気なく手に取った本。「共病文庫」と手書きで書かれたその本のページをめくると、そこに書かれていたのはクラスメイト、山内桜良の闘病日記。お互いただのクラスメイトとしか思っていなかった●●と桜良の関係はここから始まります。彼女の家族しか知らなかった彼女の病気について知った●●。●●は彼女の良き理解者として二人は一緒に過ごすようになり、お互いの印象や彼の心境に変化がみられます。「残りの時間を精一杯生きたい」彼女と「彼女のために生きたい」彼の結末はどうなるのか。読みながら思わず涙がこぼれてしまう、感動的な物語です。

この本には読んだ人が感動したり、なるほどと思ったりするような工夫がたくさんあります。その中で私が紹介したいのは、主人公である彼●●の呼び方です。私が先程から書いている●●は名前を隠すためのものです。実際に山内桜良が遺していた共病文庫の彼は●●と表されており、主人公の名前は最後まで読み進めなければ出てきません。また、小説の中でも本名ではなく、「地味なクラスメイトくん」や「秘密を知っているクラスメイトくん」などと書き表されています。最後になぜこのように書き表されているかが分かるので、文章を読むだけでなく、物語が進むにつれて変化する彼の名前の表し方やそこから読み取れる、彼と登場人物との関係性にも着目してほしいです。

私はこの本を読んでとても感動し、作者のたくさんの工夫に驚かされたと同時に、生き方について考えさせられました。自分を見直すきっかけにもなると思います。ぜひ、手に取って読んでみてください。

子育て中のあなたに子どもの成長と安全 (浅野学)

[おすすめしたい本]

『さとるのじてんしゃ』

大石真／文 北田卓史／絵

この夏、学童保育で働く機会を得ました。「机の上に座ってはだめ」「食事中は立たない」「上手に工作出来たね」など様々な声が飛び交います。ふざけてヒヤリとする場面も多々あります。全力でぶつかってくる子供達を全力で受け止めます。我が家の子供はすでに成人しており、久々に遭遇する場面でした。しかし、毎日の子供達との挨拶や会話、ふれあいなどからこちらも元気を貰いました。

子育て中の皆さんは、子供からおねだりされた、子供が約束を守らなかった、そのような時はどのように対応されていますか。私は学童保育で子供達と一緒に過ごす中で、昔読んだ本の事を思い出していました。

「さとるの自転車」 この本は私が小学生の時の低学年向き課題図書です。昭和の時代を感じる場面もありますが、以前、平成生まれのわが子に読み聞かせしたところ、何度も繰り返し読むようにせがまれました。補助輪なしで自転車に乗ることに夢中だった自分と主人公を重ね合わせていたのかもしれませんが。

主人公のさとるは、あこがれの自転車を買って貰います。しかし運転が未熟なのに、お母さんとの約束を破り通りへ出て危うく事故に遭いそうになります。そのため自転車を物置にしまわれ、自転車に乗ることが出来なくなってしまうのです。もしあなたがお母さんだったら、さとるだったらどうしますか。

何が安全なのか、ルールや約束を守ることの大切さを学んでいきます。読み終えたあとで、文中に出てくる「危ないと取り上げてしまっちは、いつまでも子供のままですよ」といった言葉が印象に残ることでしょう。安全が全てに優先するのならば結局何もせずにいた方が良いのかもしれませんが。でもそれでは子供の成長は望めません。子供だけでなく、子供とふれあう大人の方にもぜひ読んで頂きたい一冊です。創作童話ですが、読み終えた後にすがすがしさを感じる事が出来ると思います。

愛は愛なのだ (冬野邦子)

[おすすめしたい本]

『クララとお日さま』

カズオ・イシグロ／著 土屋政雄／訳

「クララとお日さま」は愛の物語だ。向上処置なる遺伝子操作やそれを享受できるか否かに象徴される格差、祈りと信仰など様々なテーマを含んでいるが、私にとっては愛そのものの物語だった。クララは優れた観察眼と理解力を持つAI搭載の人型ロボットで、向上処置後病弱となったジョジーの「人工親友」として購入される。ジョジーに最善を提供するため学び努力し続けるクララは、ジョジーの病状が悪化し命が危ぶまれる事態になると、およそAIロボットとは思えぬ行動を取る。太陽光を動力源とするクララは太陽には大いなる力があると信じ込み、ジョジーを助けてくださいとお願いするため夕日を追って走り出す。願いが聞き届けられそうにないとみると、太陽が嫌う（とクララが思い込んでいる）マシンを壊し太陽の歡心を買おうとする。愚かだ。だが背丈を越す草を掻き分け夕日に向かって走り続ける姿や、マシンを壊すために自分の機能の中核にある大切な溶液を差し出す一途な思いは胸を打つ。人間に奉仕するよう作られた製品だとか、プログラムが不完全だからだとか言えるのは知っている。それでもクララの無垢な献身は愛としか言いようがない。そもそも私たち人間だって遺伝子の巧妙な企みによって我が子を愛してるのかもしれないし、私など不完全なプログラムの見本のような親だ。健康を取り戻したジョジーは「今度帰ったときはもう会えないかもしれないけど、あなたは最高の親友だったわ」とクララを抱きしめて、大学に旅立っていく。最後にはクララは廃品置き場の固い地面に座ってこう言う。「どうやら役目を果たせたようです」もう泣かずにはいられない。誰かを心から思うなら、人だろうが機械だろうがそこにはきっと愛があるのだ。



「踏み出しの一步」が私に教えてくれたこと（今枝璃虹）

[おすすめしたい本]

『夢をかなえるゾウ』

水野敬也／著

中学1年生の時、担任の先生が私に読んで欲しいと『夢をかなえるゾウ』を紹介してくれた。先生に「面白いし人生が変わるかもよ」と言われ、読む前には今までで一番ワクワクした。この本を知った時からずっと、表紙とタイトルがとても記憶に残っている。

この本は、人生を変えたいけれど何もできない主人公の前に、「ガネーシャ」というゾウの姿をした関西弁を話すいい加減な神様が突然現れて、関西弁で教えを説きながら主人公の人生を変えていくという物語だ。自己啓発本のようなのだが、まるで漫才を見ているように面白く、思わず笑顔になってしまうため、新感覚の読書経験が積める。その中で、ガネーシャの教えは全部で29個ある。実際に行動に移せることがほとんどなので、この本を読み挑戦してみたい。

私がこの本で心に響いたのは、ガネーシャの「その日頑張れた自分をホメる」と言う言葉だ。「頑張ろうと思っても頑張られへん本当の理由、それはな、『頑張らなあかん』て考えること自体が楽しいからなんや。人間は楽しいこと、やりたいことしかできないようになってるんや。」本当にその通りだと感じた。例えば、勉強、運動など全ての事において、自分は努力をしてもなかなか成果が出ないのに友達は成果が出ているのはどうしてだと思ふこともある。だが、人と比べるのではなく、自分がやりたいことや、その為に必要なことを考えるべきなのだ。

この本は、自分が夢中になれる事を見つけようと思わせてくれる。この本に出てくるゾウ、ガネーシャは神様なのに近所の関西弁のおじさんみたいだ。関西らしい性格や人柄にも注目して読んでほしい。一つ一つの「ガネーシャ」の言葉に感動するだろう。この本を読んで未来への1ページが開けますように。



私の知らなかった世界 (村上裕香)

[おすすめしたい本]

『夜のピクニック』

恩田陸／著

私がこの本を手にとった時、私はクラスになかなか馴染めず、休み時間はよく本を読んでいた。ある日、学校に本を持って行くのを忘れてしまい、しづしづ学級文庫の本を読むこととなり、偶然この本と出会いました。読み始めてすぐ「なんだ、歩行祭という八十キロ歩くだけの物語じゃないか」と思ったのですが、読み進めていくうちに、登場人物が何気ない会話を楽しんでいる様子が当時の私にはとても輝いて見えました。

登場人物の融と貴子は、母親の違う異母兄弟であるにも関わらず、同じ高校のクラスメイトでした。貴子の父親が貴子の母親以外の女性と不倫して産まれた子供、それが融だったのです。それゆえふたりはお互いに避け合っていました。そんな状況の中、貴子は歩行祭で八十キロを歩き通すだけでなく、融に思い切って話しかけるとい賭けに挑みます。

私は、この本で初めて「異母兄弟」という言葉を知りました。父親を取られた貴子の心情はとても複雑であったはずですが、同じクラスで過ごす二人にどんな葛藤があったのか、共感したくても理解できない自分がいました。貴子がしようとしている賭けは本当に勇気のいる行動だと思います。異母兄弟以外にも複雑な家族関係があることを考えたことがなく、親同士の身勝手な行動が何の罪もない子供達に影響されてしまう理不尽さについて考えさせられました。

貴子が血の繋がりに世間の目に捉われる事なく、相手を理解しようとする姿は、不安定でありながら、まぶしくもありました。現状から抜け出して事態を前に進めていくことは、大きな不安が伴うと思います。しかし、それを振り払いながら、前へと進んで行こうとする姿が印象的でした。当時の私のように、人間関係に悩んでいる人に前へ進もうと背中を押してくれる、そんな本だと思います。